

## 2 節 アフリカ

### アフリカ大陸 — 人類の故郷

アフリカ大陸は大きい。中国、アメリカ、インド、それに北欧を除くヨーロッパを合わせたよりも広く、全陸地の 22.3% を占めている。国家の数は 54 で、アジア 47、ヨーロッパ 45 カ国を上回る。人口はおよそ 15 億 1 千 5 百万人で、18% (2024) を占める。

アフリカの地域区分は、サハラを基準にして南北に分けるのが一般的である。これより北をアラブ世界の北アフリカ、南は黒人の住む中央アフリカと南アフリカである。なお、中央、南アフリカを、西アフリカ、中部アフリカ、東アフリカ、南部アフリカに分けることもある。北アフリカ、ギニア湾岸北部地域、西アフリカ、ザイール（コンゴ）川流域を中心とする中部アフリカの大部分は、厳しい自然条件の地域である。この地域の国々の公用語はフランス語である。東アフリカはインド洋に面した地域で、南部アフリカとともに気候条件に恵まれ、鉱産資源の豊かな地域である。

北アフリカの住民の大部分は、白色人種系のアラブ人で、言葉はアラビア語、宗教はイスラム教である。北アフリカと西アジアは、宗教と言葉が共通で、中近東の西端に入れる場合が多く、マグリブ(\*) 呼ばれている。西アジアと北アフリカの 22 カ国は、カイロを本部とする民族主義的なアラブ連盟を結成している。

中央、南アフリカに住む人々の大部分は黒人で、ブラックアフリカと呼ばれている。その他にコンゴ盆地を中心とする地域にピグミー族とカラハリ沙漠を中心にサン族、旧称ブッシュマンの一部が、採集、狩猟生活をしている。



サン族（旧称ブッシュマン）ナミビアにて

(\*) マグリブ (Maghrib) 北アフリカのモロッコ、アルジェリア、チュニジアをアラビア語で「日の沈む地」、すなわち「西」を意味している

一方、南部アフリカには多くの白人が住んでいる。宗教、言語からアフリカを見ると、実に多様である。言語は、基準の取り方にもよるが、約 800 種が話されているともいわれている。宗教は、植民地時代の布教活動によりキリスト教徒が多いが、祖先や自然物を対象とする伝統的な信仰も見られるし、サハラ南側の国々にもイスラム教徒が分布している。

### 赤道をはさんで南北対称な気候区

アフリカ大陸の中央部を赤道が通っている。気候区は赤道をはさんで南北それぞれ緯度 35 度付近まで南北対称に分布している。コンゴ盆地を中心とする地域は年中高温多湿で熱帯雨林が繁茂しジャングルを形成しており、多種多様な生物種の住処となっている。その中にはエイズウイルスやエボラウイルスなど人間生活を脅かすものも存在する。

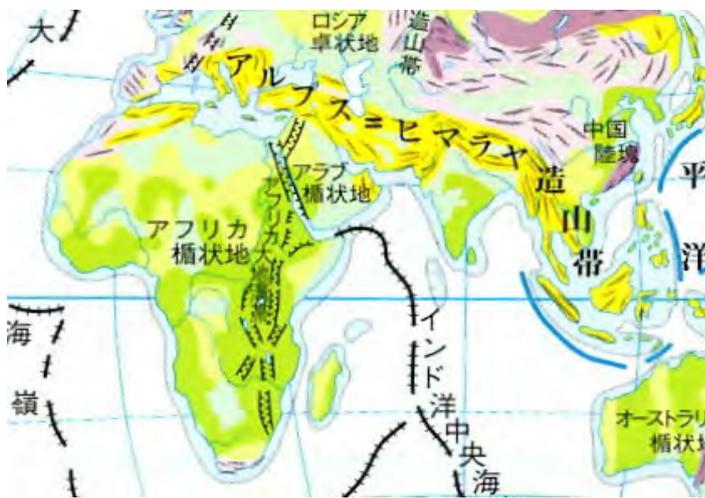
熱帯雨林の北と南側には、サバナが広がる。ここは、冬の乾季にも耐える耐乾性樹木がまばらに生え、夏の雨季に草が生える熱帯草原である。ここの植物を餌にするゾウ、シマウマ、キリン、又

一、インパラなどの草食動物、それらを餌とするライオン、チーターやハイエナなどの肉食動物が生息している。その北と南側は、降水量が少なくなりステップ気候となり、更に降水量が少なくなると沙漠気候へと変化する。なかでも、サハラはアフリカ大陸の約 1/3 を占め、ほぼアメリカ合衆国の面積に匹敵する沙漠である。沙漠の北と南、つまり大陸の北端と南端にはステップ気候を経て温帯となり、最適気候の一つであるの地中海性気候がみられ、ブドウや柑橘類を始めとする果物の産地となっている。

### 単調な海岸と大地の裂け目

アフリカの海岸線は凹凸が少なく直線的である。面積で 1/3 以下のオーストラリアよりも海岸線が 1 万kmも短い。また、アフリカ大陸の南部には海拔高度 1,000m を越える高原が広がり、東部には 3,000m のエチオピア高原、ケニアとタンザニアには 2,000m を越す東アフリカ高地が広がり、ヨーロッパから避暑を目的とした観光客が集る。

アフリカ大陸の地図を見ると、エチオピア中央部からヴィクトリア湖の東側にかけてとウガンダとコンゴの国境となっているアルバート湖からマラウイ湖につづく地帯に、湖が並んでいる。この地帯は、紅海からザンベジ川河口まで続くアフリカ大地溝帯、グレートリフトバレーと呼ばれ、幅が 35 ~ 100 km、南北 7,000 km にわたる巨大な地球の裂け目である。現在も 1 年で 5 mm ずつ離れており、もしこのまま 1 億年も続くと紅海と地中海が繋がり、グレートリフトバレー東側がアフリカ大陸から切り離され巨大な島になるといわれている。



書院 新詳高等地図 ⑤世界の地帯構造より

### <イスラムの聖地 ハラール>

エチオピアはエリトリアの独立で外港を失った。港を求めて首都アディスアベバからジプチまで鉄道を伸ばして以来、中継地として発展してきたのがハラール近郊のディレダワである。首都アディスアベバから 452 km だが、その間にグレートリフトバレー、アフリカ大地溝帯が横たわっている。首都と中継地を結ぶ幹線道路とはいっても大規模な橋やトンネルはなく、大地溝帯の斜面を忠実に縫いながら走ることになる。所要時間は車で 10 時間を超すという。ここは地元旅行業者の薦めで所要時間 1 時間の飛行機を利用し、ハラールへ



旧市街地前のカート売り

向かった。

ハラールは標高 2,000m、爽やかな気候であった。旧市街は壁に囲まれた町で知られ、「ハラール ジュゴル要塞歴史都市」として世界遺産に登録されている。ハイレ セラシエ皇帝の父の出身地に加えて、イスラム教の聖地として今日でも多くの巡礼者が訪れるところだった。また、ハラール地方が世界で始めてコーヒーの栽培を始めたところだという。露店のコーヒー店があり、モカ コーヒーの香りが漂う街でもあった。

### 植民地時代の「負の遺産」 — 飢餓が出ているのに農産物の輸出が多い

ヨーロッパでアジアへの関心が高まり、バスコ ダ ガマによってインド航路が開かれた。これによって、ポルトガルはイスラム教徒の世界、北アフリカや中東を通らずにアジアと交易が可能になった。

16 世紀に入るとスペインやポルトガル領の南アメリカや西インド諸島などで大量の労働力が必要になると、アフリカ大陸は奴隷の供給地となった。スペインとポルトガルに加えてイギリス、フランスも争って奴隷貿易に加わった。なかでも、イギリスは国王の後押しもあり、最大の奴隷貿易国となった。その規模は少なくとも 1,000 万人以上といわれている。奴隷貿易がアフリカに及ぼした影響は、単に連れ去られた人数の被害に止まらず、自給自足の産業経済構造が破壊され、飢餓が蔓延した。1650 年から 200 年間人口は増加しなかったほど深刻であった。

19 世紀に入り奴隷貿易に対する批判が強まり廃止へと向かう。しかし、19 世紀後半になるとヨーロッパ列強による植民地獲得競争が激しくなる。民族、宗教などを考慮することなく宗主国の一方的な都合で分割された植民地の境界が、直線的な国境となって今日に引き継がれている。その結果、1 つの国家に異なる言語、宗教、習慣などもつ民族が寄り集まったモザイク国家となって植



民地時代の負の遺産を引きずっている。その一つの例がタンザニアとケニアの国境である。ドイツ皇帝が「イギリス領内には高い山が 2 つ(\*)もあるのに、ドイツ領には 1 つもない。ドイツ人が登頂したキリマンジャロ山を譲って欲しい」と民族や部族の分布などを考慮することなくヴィクトリア女王に願い出た証が地図上に残っている。

また、ヨーロッパ人に適した気候の東アフリカから南アフリカにかけての土地は、ヨーロッパ人に奪われた。一方、西アフリカなどのヨーロッパ人に不適な気候地域では、土地は奪われずに済んだが、重い人頭税などのため、商品作物栽培をせざるを得なかった。その結果、食料生産が犠牲にされてしまい飢餓が慢性化する原因となった。

1957 年に黒人国家ガーナが独立、翌年にはギニアも独立する。そして、1960 年に 17 カ国もの独立国が誕生して「アフリカの年」と呼ばれるまでになった。現在の中南アフリカ諸国の多くが、独立を勝ち取りながらも発展途上国の段階に止まり、食料不足に悩んでいる。その一方で、農水産物を輸出している国が多い。例えば、マリでは綿花、エチオピアやウガンダではコーヒー、モザンビークはエビ、コートジボワールとガーナはカカオ、ケニアは茶、セネガルは落花生などなどである。

要するに、アフリカの多くの国々は、宗主国によって自給自足経済が破壊され、宗主国の農業や

工業原料の供給地に変えられてしまったのである。そのため、モノカルチャー経済による農産物などの一次産品を輸出し、食料や工業製品を輸入する経済構造にされてしまった。さらに、民族的な対立、エスカレートして内戦状態の国、沙漠化の深刻化している国もあり、近代化への道はかなり厳しい。

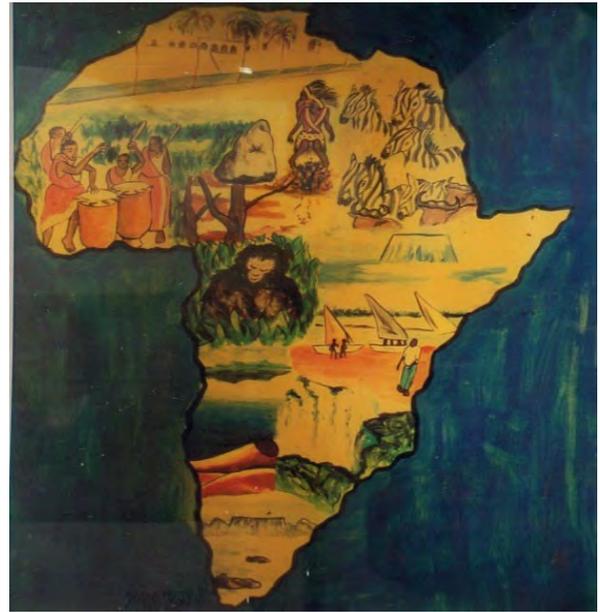
(\*) 5,199mのケニア山(図の上方)と5,895mのキリマンジャロ(図の中央)

### <アフリカ人の描いたアフリカ像>

ナミビアの中核都市でガソリンスタンドに立ち寄った。柱にアフリカ大陸絵図が貼られていた。大胆な色使いに魅かれて目をやると、日本人のアフリカ像と違うことに興味を覚えた。

絵図の中央部に青々とした草原を背景に天性のリズム感漂う人々の姿はアフリカ人の特性を表わし、シマウマとゴリラは野生動物を代表しているのだろうか。そして、頂の白いキリマンジャロとヴィクトリアフォールが見えるが、その間にルクソールのナイル川を行き交う帆船、ファルーカがある。これらは多分に水への憧れの表れからまとめられたのだろう。地中海に面した北部に、土壁に囲まれた集落か城塞が見えるが、サハラは極端に狭くなっている。南のカラハリ沙漠あたりにテーブルマウンテンが見える。

これらを見ていると、アフリカ人の心象風景を大陸の地図上にそのまま書き記した感じがした。



### 遠いアフリカ

アフリカの国々を旅して実感したことは、航空路やビザなどの関係で日本からの実際の距離(10,000~15,000 km)以上に遠く感じられることであった。

#### \* ビザと外貨両替

日本のパスポートを持っていると、ビザなしで世界のほとんどの国に行くことができる。ビザの必要な国は34カ国で、そのうち20カ国がアフリカの国々である。近年旅したアフリカのマダガスカル、ザンビア、ジンバブエ、エチオピアはビザが必要であった。現地到着後空港での取得も可能だが、日本で取得様子を記してみる。

エチオピア(2012)は、在日エチオピア大使館ホームページよりビザ申請書ダウンロードし、郵送で受け付けてもらった。ビザの有効期限が申請日から起算ということで、1ヶ月の旅だったが3ヶ月有効のマルチプル、観光ビザを申請した。往復の一般書留代金プラス申請代30\$だった。

2001年のマダガスカルは申請用紙4枚、航空券予約証コピー4枚、写真4枚に費用が2,400円。さらに、入国時に入国カードの外に外貨申告書が必要、外貨両替するときは申告書を提示し、外貨金額、交換レート、日付を記入してもらい、出国時に申告書に記載されている外貨の残額と、手持ちの外貨が照合と面倒極まりなかった。

2010年のザンビアとジンバブエは、陸路で入国時に取得したが、陽気な対応で何ら問題がなかった。

#### \* 予防接種

南アフリカからナミビア、ボツワナなどアフリカ南部の旅の時、義務付けられてはいないが、現地で提示を求められる可能性もあるというので念のため黄熱病予防接種証明書、イエローカードを持参した。山形で接種はできないので、仙台検疫所のある塩釜市に電話で予約し、仙台の国立病院機構仙台医療センターで受けた。証明書込みで10,830円だった。他に破傷風(3,500円)とA型肝炎(7,500円)も勧められたが、2回、3回と必要だったので、今回は接種を見送った。予防接種のないマラリアについては、お世話になっている内科医に相談し、予防薬を取寄せてもらった。保険が利かないので6錠×2で11,690円だった。現地発着ツアー参加のアメリカ人は保険が利くので無料とのこと、アイルランド人は、日本はどうしてそんなに高額なのかと不思議がっていた。

#### \* 飛行時間

日本からアフリカへの直行便はエジプトとエチオピアなどに限定される。中東あるいは東南アジア乗り継ぎか、旧宗主国のヨーロッパ経由が一般的となる。

エチオピア行の時は、アディスアベバ到着、出発時間と料金を考慮してエミレーツ航空を利用した。飛行時間は、成田→ドバイ12時間、ドバイ→アディスアベバ4時間、乗り継ぎ待ち時間6時間で、合計22時間であった。

アフリカで日本から最も遠い南アフリカのケープタウンは、到着時刻を考慮してマレーシア経由にした。成田→クアラルンプール7時間35分、乗り継ぎ待ち時間5時間15分、クアラルンプール→ケープタウン13時間24分、合計25時間を要した。

マダガスカルは、日本から南極大陸や中央アメリカとほぼ同じ距離である。シンガポール航空を利用したが、成田→シンガポールまで6時間、乗り継ぎ待ち時間4時間40分、シンガポール→アンタナナリボ11時間40分で、ほぼ丸1日を要した。

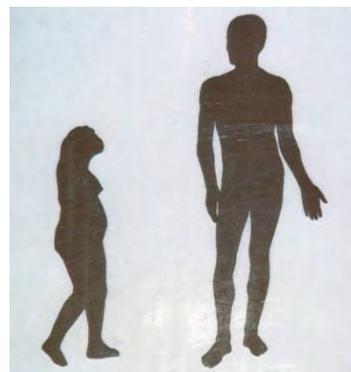
成田からヨーロッパやアメリカ東部の主要都市までの所要時間が11時間から12時間だから、アフリカは何処に行くにも遠い。

### こんなアフリカ、あんなアフリカ

#### \* 人類発祥の地

人類の母方の祖先を遡ると、アフリカの女性にたどりつくことが遺伝子の研究で明らかになった。人類は東アフリカから世界各地に散らばったという説が有力である。

最古の人類である猿人の化石人骨の大部分は、アフリカ大陸から発見されている。第二世代の人類である原人の化石人骨は、ユーラシア大陸の各地から出土しているが、そのルーツを辿るとアフリカ大陸に行き着くといわれている。最近では、ホモサピエンスはアフリカで誕生し、世界各地に移動することで様々な人種に分かれていったとされている。タンザニアのラエトリ遺跡にはアフール猿人



の「家族」による 360 万年前の最古の足跡があるし、エチオピアでも二足歩行の化石が発見されている。どちらの場所も大地溝帯に集中している。

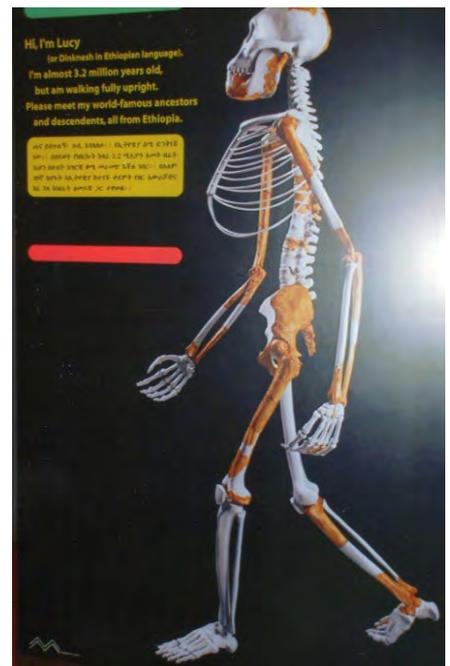
前頁右上：猿人と現代人の身長（エチオピア：国立博物館）

右：猿人の化石人骨図（エチオピア：国立博物館）

（猿人の化石人骨の左上に添えられていた英文）

Hi, I'm Lucy (or Dinknesh in Ethiopian language). I'm almost 3.2 million years old, but am walking fully upright. Please meet my world-famous ancestors and descendents, all from Ethiopia.

こんにちは、私はルーシー（エチオピア語でディンクネッシュ）です。私はほぼ 320 万歳だが、完全に直立して歩いています。エチオピアの世界的に有名な私の先祖と子孫に会ってください。



### \* 暮らしに根付く多様な文化

アフリカ土着の民族は、それぞれの言葉で、暮らしに根付いた織物や彫刻、歌や踊り、民族楽器などの多様な文化が受け継いでいる。言語の数は 800 と 1,000 ともいわれ、部族が違うと言葉が通じず、英語やフランス語など第三国の言葉を公用語にしている国が多い。

【資料】民族と部族の違い

民族 → 言語、社会形態、食習慣、禁忌、宗教  
ザンビアの布（ろうけつ染め）

などの文化面の特徴で分類される

部族 → 民族の文化面の特徴を更に絞り込んだもの



### \* 野生動物の住処 サバナ

東アフリカから南部アフリカにかけてのサバナは野生動物の王国である。大型の草食動物とそれを狙う肉食獣が暮らしている。中でもケニアのタンザニアとの国境に接するマサイマラ保護区、ボツワナ北部のチョベ国立公園は世界的にも有名である。広大な草原にシマウマやヌー、インパラなどが群れを成し、それらを狙うライオンやチーターの様子が普通に見られる。



### \* レアメタル産出

アフリカには資源に恵まれた国が多い。2000年代から様々な資源が値上がりし、経済成長を左右した。石油や天然ガス、ウランといったエネルギー資源のほかに、レアメタル<sup>(\*)</sup>の産出もある。世界に占めるアフリカでのレアメタルの埋蔵量は、プラチナが90%、コバルトが50%になるといわれる。

(\*)レアメタル 埋蔵量や産出量が少ない金属のこと。携帯電話や情報機器の部品など先端産業に用いられるため、たくさん必要となっている。産出国は限られ、工業国では確保が国の課題になっている。

### \* 最大の貿易相手国は中国

中国はアフリカと経済で繋がりが深く、最大の貿易相手国である。主に石油や鉱物資源をアフリカから輸入している。就任したばかりの習近平国家主席はタンザニア、南アフリカ、コンゴを訪問し「アフリカ重視」をアピールした。しかし、アフリカで働く中国人は、例外なく自分たちだけの隔離されたコロニーをつくり、現地の人々との交わりが殆どないのが気になった。

### \* 独自の生態系 マダガスカル

アフリカは大陸ばかりでなく、インド洋に浮かぶ島も含まれる。中でもマダガスカルは7つ目の大陸ともいわれる。6,000万~8,000万年前に大陸から離れたため、独自の進化を遂げた原猿、レムールやカメレオンなどが多数生息している。そして、多くが固有種である。



カメレオン



カンムリキツネザル

### <アフリカンフードの代表 ウガリ>

ケープタウンからヴィクトリアフォールまでの旅は、ケニア人のコックの下で、手伝いの域を出なかったが自炊であった。でも、これが幸いしてアフリカンフードを結構食べられた。朝食はコーンフレークが多かったが、夕食の主食はパン、飯、ジャガイモ、ウガリ、ヤムイモでなかなか変化に富んでいた。そして、何よりも主食と副食、日本式に表現すればご飯とおかずの関係が保たれており、毎夕、主食と副食の食材を楽しみながらの食事だった。米はインディカ種で、沸騰した湯に米を入れる湯取り法、飯を炊くというより茹でる感じだった。日本のふっくらとした飯には程遠いが、サフランで香り付けがされることもあった。

最も回数が多かったのがウガリだった。これこそアフリカンフードの代表といえる。ケニアやタンザニアなど東アフリカではウガリ (ugali) だが、ジンバブエではサザ (sadza)、南アフリカではバップ (pap)、ザンビアはシマ (nsima) など、地域により呼び名はさまざまだった。白トウモロコシの粉を熱湯に入れ、大きなへら (しゃもじ) でこねて耳たぶほどの柔らかさにしたものである。途中で立寄った何処のスーパーマーケットにも 2 kg の紙袋詰めされ並んでいた。味はほとんどない。日本で食べている黄色いスイートコーンとは別品種だという。こちらは甘すぎて主食に向かず、もっぱら家畜の餌に廻すのだという。

ウガリの食べ方は、牛、羊あるいは鶏のぶつ切り肉とタマネギやニンジンなどを煮込み、缶詰のデミグラスソースで味付けしたシチューを皿に取り、ウガリを皿の端に載せて食べた。これが時にはトマト味、豆類の煮込みへと変化した。味付けの基本は塩で、ニンニクと唐辛子が適度に加えられていた。肉の脂と塩味、ニンニクの香り、トマトの酸味にぴりっとくる辛さがアフリカの気候にマッチしていた。

ウガリを作った後の鍋底に硬くなったウガリがこびり付き、タワシで擦ってもなかなか取れなかった。ウガリつくりの熱湯でこねるのも大変というか、かなりの力仕事だったし、後始末もまた大変な力仕事だった。

ところで、トウモロコシはアフリカ原産ではない。新大陸の先住民族であるインディヘナが日々の糧にしていた作物とされている。コロンブスがキューバで初めてトウモロコシに出会って、ヨーロッパ、スペインにもち込まれた。その後、フランス、イタリア、トルコそして北アフリカへと広まったとされている。



西アフリカへは、ポルトガル人が奴隷を南アメリカに運ぶ時の食料にするため 16 世紀に植民地に導入し、これが 17 世紀には南アフリカにまで広まった。そして、19 世紀中頃、黄色いトウモロコシよりも収穫量が多い白トウモロコシが低賃金肉体労働者用に栽培され、普及していった。ところで、トウモロコシがもたらされる以前のアフリカで食べられていたものは、アフリカ原産のモロコシやシコクビエなどが知られている。

なお、鶴岡の出羽庄内国際村の行事、「せかいの台所」でカメルーン料理を作って食べる機会があった。キャサバ芋を乾燥させて粉にしたガリを熱湯でこねた団子状のフーフーはウガリと全く同じ作り方、食べ方であった。

## エジプト (エジプト アラブ共和国)

### ナイル川

エジプトの国土面積は日本の 2.7 倍もあるが、97% は沙漠である。従って、居住地域はナイル川沿いに細長く伸びているだけで、国土の 5.5% に過ぎない。アスワンハイダム建設などによって

耕地を拡大したが、耕地面積は国土のわずかに 2.6%、その大部分がナイルの水で潤されている。ナイルはまさに「命の母」である。ナイル川は、ヴィクトリア湖を水源とする白ナイルとエチオピア高原から水を集める青ナイルが中心で、南スーダン、スーダンを通してエジプトで地中海に注ぐ世界最長、6,690m の大河である。双方の水源が、6月から9月が雨季に当たるため夏に水量が最大に達する。青ナイル川は、長さでは白ナイル川に及ばないが、エジプトに流れ着く水の半分以上、運んでくる堆積物の大半を占めていた。

## 灌漑農業とアスワンハイダム

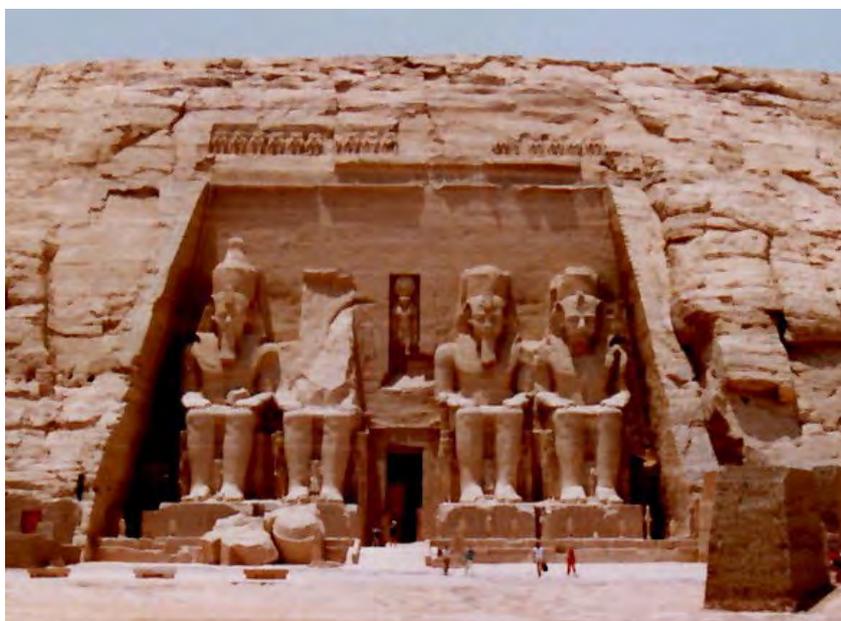
古代エジプト人は、ナイル川の水を水路で畑、ベイスンに導き、数週間そのままにして天然の肥料分を沈殿させ、十分に水を吸わせた。その後排水を行い、冬小麦などの種をまくベイスン灌漑農業を行ってきた。しかし、ナイル川の水量は年によって大きく変動する。灌漑可能な面積は変わり、豊作凶作の差も大きい。それで、アスワンでナイル川の水位を測ることは国王の重要な儀式の一つになっていた。「ナイルの賜物」は、古代エジプト人の「努力の賜物」でもあった。

古代エジプト文明の地は、前 6 世紀にアケメネ朝ペルシャに敗れ、その幕を閉じる。その後、アレクサンダー、ギリシャ人、さらにはローマ帝国、ビザンチン帝国の領土となる。そして、7 世紀にアラブ人によって征服され、イスラム化され、アラブ化される。

19 世紀に入り、オスマン帝国が力を弱まってくると、ナイル川下流域に新しい動きが見られるようになる。エジプトが「世界の工場」イギリスの綿花供給地として世界経済に組み込まれ、ナイル下流のデルタ地帯は「ランカシャーの綿花畑」(\*)の役割を担わされるようになった。

綿花は夏作物で、ナイル川の水の少ない春に種を蒔く。ナイル川にダムを造って水位を上げ、いつでも畑に水を引けるようにし、ベイスン灌漑農業から通年灌漑農業へと変化した。1903 年、アスワンダムの完成はこの変化を加速させた。しかし、水利権はイギリス人が握っており、さらにイギリスはスエズ運河を乗っ取り、1882 年にはエジプト全土を占領し、スエズ運河の通行料金を独占していた。

1952 年、ナセルを指導者とするエジプト革命を成功に導き、外国に利用されてきた国王を退け、共和国を誕生させた。そして、「ナイルの賜物」を更に大きなものにし、食糧問題の解決のためロックフィル式のアスワンハイダムを建設



移築されたアブ シンベル神殿

することにした。国民への演説で、「かつてクフ王のピラミットは世界の七不思議の 1 つだったが、それは帝王個人に奉仕するに過ぎなかった。これに対して、現代のピラミットはそれより 17 倍の石を必要とするが、現代のピラミットはエジプト人民に奉仕するものである」と訴えた。資金調達

のためスエズ運河を国有化し、ソ連の資金と技術援助を全面的に受けて、1960年に着工し、10年後に完成した。

ダム completion で約 10 万人のヌビア人が強制移住させられ、多く古代ヌビア文化の遺跡が水没してしまった。その中で最も重要な遺跡、3,300 年前、ラムセス 2 世が建造したアブ シンベル神殿は、ユネスコの手で 1,041 個の岩塊に解体され水位の及ばない高さに移築された。

もう 30 数年前になったが、イエメンの帰りにエジプトを旅した。アスワンから列車でハイダムに行った。プラットフォームから外れた列車から降りるのに目一杯足を伸ばしても地面に届かなかった。ハイダムは美しい公園になっていた。

ロックフィル式のダムは、高さは 111m、基礎部分幅 980m、長さ 3.8 km。ダム湖はナセル湖と命名され、長さはエジプト領内 350 km、スーダン領内 150 km で計 500 km、貯水量は世界 3 位で、ナイル川の 1 年以上の水を溜め込む能力をもつと記されていた。

ナセル湖付近は、夏の気温が優に 40°C を越える。熱風が吹き、降水量は年間を通してほぼゼロ



堰堤上の公園



ダム湖のナセル湖

である。ナセル湖からの蒸発する水量はどれ位になるのだろうか。乾燥の激しいところでの蒸発は霧を生み、積乱雲が湧き、にわか雨が降るとも聞いた。

ナイル川の氾濫は、古代から肥沃な土壌を運んできていた。ここで堰き止められたということは、自然と調和し「ナイルの賜物」を巧みに生かしてきた古代エジプトのベイスン灌漑農業との決別を意味している。なお、ダム直下に発電所があったが、警察官が監視しており、何故か撮影禁止であった。

(\*) ランカシャー地方 イギリス、イングランド北西部。ペニン山脈西麓で、偏西風の風上にあたるため温度が高く、近郊で石炭を産出するなどの諸条件に恵まれ、産業革命の発祥地となった。中心はマンチェスターで、マーシー川河口のリバプールは原料の輸入、製品の輸出する貿易港で、世界的な綿工業地域を形成している。

## アスワンハイダムの功罪

- 農業、漁業への影響 灌漑用水確保により耕地の拡大と多毛作が可能 ナセル湖での漁業
- 水力発電による電力供給 電力の安定供給。エジプトの電力需要の 1/5 をまかなう
- 観光への影響 ダム湖観光、遺跡巡りのクルージング
- 地域住民への影響 先住民族ヌビア人約 10 万人の強制退去、移住

- ・ 住民の健康への影響

### <スエズ運河>

スエズ運河は、地中海側のポートサイドと紅海側のスエズを結ぶ全長約 160 km の水路式運河である。1869 年の開通時は水路幅 44m、水深 10m だったが、1960 年代から運河は全面的な改修が行われた。途中、スエズ動乱で長く中断したが、1980 年に拡張計画が終了した。これによって航路幅は 160m に、水深は 19.5m となり、通過できる船舶の規模も拡大した。

運河通航量を見ると、通航隻数は 1982 年の 23 万隻をピークに船舶の大型化を背景に減少を続けてきたが、およそ 15,000 隻でこれは世界の海運の 7% に当たる。通過船舶の 22% が石油タンカーで、44% がコンテナ船である。以前は、石油タンカーが多かったが、近年、喜望峰経由の超大型タンカーが就航、スエズと地中海パイプライン (SUMED) の容量が増大により石油タンカーの通航量が減少している。

その一方でアジアとヨーロッパ間の貿易の増大に伴ってコンテナ船の通航量が増えている。1 隻あたり平均料金は 251,000 ドルで、スエズ運河は通行できる船舶の大きさ、総通行量ともにパナマ運河を上回る。運河通航料収入は、エジプトの外貨収入源として重要な役割を果たしており 2014/2015 年度は、5,362 百万ドルであった。なお、運河通過所要時間は約 11 時間である。運河の効果はなんといっても近道効果である。ロンドンとペルシャ湾間航路の場合、アフリカ南端の喜望峰を経由すると 11,300 カイリ (\*) (20,900 km) だが、スエズ運河経由だと 6,400 カイリ (12,000 km) と 43% 短縮できる。航行日数でいうと 20 ノットで航行する場合、喜望峰経由だと 24 日かかるが、スエズ運河経由だと 14 日で済む。

ロンドンと横浜間の航路の場合、喜望峰経由だと 14,500 カイリ (26,900km) だが、スエズ運河経由だと 11,000 カイリ (20,400 km) と 24% 短縮できる。20 ノットで航行すると、スエズ運河経由の場合の航行日数は 23 日で、喜望峰経由に比べて 7 日短縮できる。

(\*) 1 カイリ=緯度 1 分の長さで 1,852m

### <これが世界的な運河?!>

エジプトの旅の締めくくりとしてスエズ運河を選らんだ。拡張工事前の 40 年数前のことである。カイロからスエズにバスで向かった。カイロの街を抜けると赤茶けた沙漠で、視界に入るのは荒涼として無機質の世界だった。

スエズは運河の南端で、運河開通後は港としての重要性を増した。それだけに何かことあるごとに狙われ、中東戦争ではことごとく破壊されたと聞く。目に飛び込んできた運河は、砂地をただ切開いた感じの水路で、石を投げると対岸届く程の幅だった。中東戦争時、運河を閉鎖する最も簡単で有効な手段がボロ船を沈めることだというのが解る。反面、これが自分の求めてきた世界的な運河かと複雑な思いになった。

スエズの街に戻りエジプトの家庭料理で知られるコシャリンで空腹を満たした。金属プレートに盛られた飯、レンズ豆、パスタの上にトマトソースをかけたもの。これに玉ネギ、トウガラシ、ニンニクと酢をかけ、混ぜ合わせて食べた。じりじりと暑いところでは、これ位刺激が強くないと食欲を刺激しない。

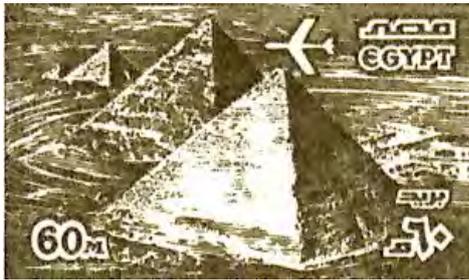
## ＜ピラミットの頂＞

ギザの街の背後に聳えるピラミットは途方もなく大きかった。目の前にしてみると、紛れもなく人間が切り出した石が積み上げられていた。ピラミットは世界の七不思議で唯一現存する建造物である。紀元前5世紀、ギリシャの歴史家ヘロドトスの著書「歴史」において、「フク王のピラミット」として報告されている。この時点で建設から2000年以上経過していた。

メンカウラー王のピラミットを目の前にした時、「登りたい!」の衝動に駆られた。高さが65.5mの半分ほどまで登った時だった。下から声がかかった。後ろめたさから降り始めると、「登れ!」の声でまた登りだし頂に達した。頂の石がかなり少なくなっており一寸した広場であった。隅に避雷針が無造作に建っていた。異様な臭いが鼻を突いた。その気になって見渡すと至る所に人間の排泄物の蒸発した後に残った白い染みと干上がってころころしたものが散在していた。世界きってのパワースポット、あるいはUFOのエネルギー補給基地といった夢の広がるところとは余りにもかけ離れた現実だった。

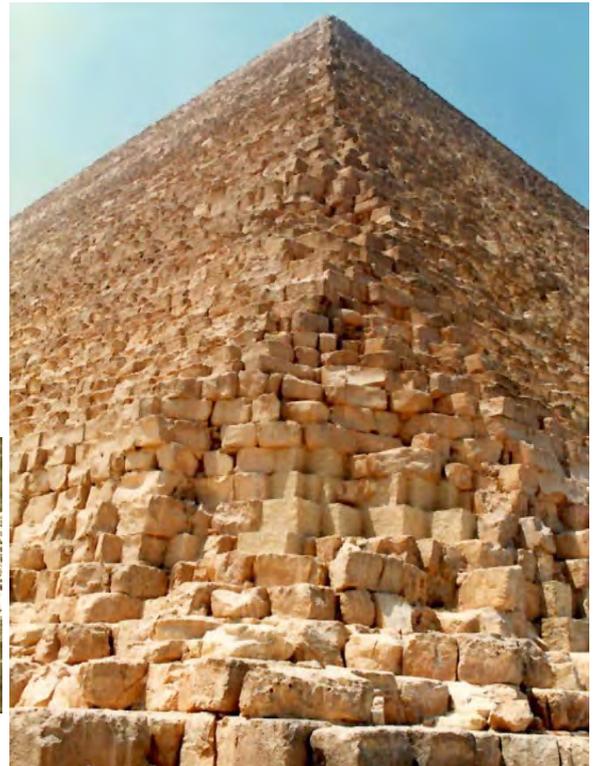
降りには、足が届かない状態で見えないところに降りるので慎重を期した。登りに声を掛けられてから1時間ほど過ぎているのに、自称監視人(?)が待っていた。

そして、目溢し料の請求が来た。そこにコーラ売りが現れた。普段はほとんど飲まないが、盗(登)



頂ということで1本買い求めた。喉へのひっかかりが全くない。薬に似た味もない。沙漠で飲むコーラは美味しいの一言に尽きた。

ピラミットに登ったのは45年近くも昔々のことである。今は転落事故防止並びに建造物保護の観点から厳禁である。「アラー! お許しを!」の願いが叶ったのか、今のところお咎めがない。



## ＜イスラム教徒の祈り＞

カイロからルクソールに向かう夜行寝台でルクソール在住の30歳位の若者と同じコンパートになった。ルクソールで宿の紹介から街案内、買い物と5日間面倒をみてもらった。彼は毎日、日没の頃になると決まって礼拝、サラート(\*)をしていた。

サラートはイスラムの五行の中で最も重要なもので1日5回行うのだが、時間ではなく太陽の動き、「空が明るくなり始める頃」、「太陽がちょうど真上にくる頃」・・・で決められていることを知った。

(\*) 礼拝は1日5回 - 5回でアラーとの気持ちの疎通ができる

Isya (就寝前)、Subuh (早朝)、Lohor (昼過ぎ)、Asar (おやつ時間)、Magrib (日没) それぞれの頭文字を

とると ISLAM (イスラム) となる

五行—正しい生活を送ること

1.信仰 (信仰の告白) 2.礼拝 (1日5回、メッカに向かって礼拝を以行う) 3.喜捨 (貧しい人への援助、寄付)

4.断食 (9月、ラマダーンは食事や飲水を日の出から日没までしない) 5.巡礼 (聖地メッカに行く義務)

祈りを終えた彼に、「素敵なお嫁さんが見つかるように・・・とお願いしたのか」とたずねると、とんでもないという表情で、アラーの教えを守り、礼拝をすれば、アラーの限りない恩恵に必ず預かれると話してくれた。日本人の神頼みとは大違いだった。考えてみると、いくら八百万の神とはいえ身体堅固、家内安全、大願成就などなど沢山のことをお願いされるより、真面目に直向な祈りの方が神に届くような気がしてきた。

なお、日本でもイスラム国からの労働者や留学生の増加で JR 東京駅、大阪駅はじめ各地にモスクの開設が相次いでいるという。2018 年末で 36 都道府県に 105 ヲ所あり、信者は 20 万人と毎日新聞が報じていた。(2019/11/28)

## エチオピア (エチオピア連邦民主共和国)

エチオピアは、紀元前 1,000 年にソロモン王に起源をもつ国、世界最古のキリスト教の国、世界三大宗教、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教が共存する国、人類発祥の国、3,000 年にわたるアフリカ唯一の独立国、コーヒー発祥の国、世界で最も巨大な断層アフリカ大地溝帯、グレートリフトバレーが走る国、世界で最も過酷な場所として「地球の地獄」の別名を持つダナキル沙漠の国、そして世界の権力者が捜し求めた「失われたアーク」が眠る国などなど、冠言葉が多く、エチオピアの奥深さを表している。国名のエチオピアは、ギリシャ語の「日に焼けた」という意味でエチオピア人の肌の色に由来している。

エチオピアは高原の国である。首都のアディスアベバの標高は 2,400m、東部のハラール 2,000 m、北端のアクスム 2,100m、南部で少数民族のコンソヤオモ溪谷への中継地のアルバミンチ 1,320mである。旅をした 1 ヲ月間は、地元鳥海山の山頂付近で生活していたようなものであった。エチオピア高原は本来の地形は平らだったが、標高が高く降雨が多いため浸食が激しく、深い谷や崖が多い。この地形は外国勢力からの防衛には適しているが、交通網整備には厄介で、経済発展上の大きなネックとなっている。

主産業である農業が国内総生産の 41%で、輸出と労働力の 80%を占めている。商品作物では「モカ コーヒー」で知られるコーヒー豆とゴマが有名で、総輸出額の 50%弱に達する。コーヒーの原産地と言われているだけに、人々に常飲されており、複数の人でコーヒーを楽しむ「ブンナ (コーヒー) セレモニー」という独特な習慣がある。

国民の大多数は黒人とアラブ人の混血のエチオピア人種が大多数を占め、他にオモロ族やアムハラ族など 80 以上少数民族が存在する多民族国家である。

## <エチオピアの国民食 インジェラ>

国内どこでも食べられるのが「インジェラ」であった。過去に 1936 年から 1941 年間の短い

期間ではあったが、イタリアの支配を受けた影響でパスタはかなり普及していた。

エチオピアの国民食といえるインジェラは、「テフ」と呼ばれるアワ科の穀物が原料である。草丈は50 cmから150 cmほどで、種子はケシの実ほどの小さいものだった。栽培地はエチオピア、エリトリアとブラジルだけと、かなり限定されているという。これを粉にして水で練り、イースト菌を加えて4日間ほどねかせて発酵させる。お湯で薄めて、油を引いた鉄板に流し込み、蓋をして少し待つ。発酵しているのので表面にプツプツと気泡ができているのを確認したら、出来上がりだという。

初めて気泡を見たとき、動物の内臓かと思ったし、発酵による酸味が妙に気になった。加えて、薄汚れた濡れ新聞紙のような灰色も食欲をそそるものではなかった。食べる時は、インジェラを主食にして、「ワット」という煮物あるいは汁気の少ないシチューのようなものを副食として食べる。勿

論、食べ方にはルールというかマナーのようなものがあった。右手でインジェラを6~7 cm位四方に千切り、そのままワットを覆い被せるように5本指で摘む。これを大きく口を開き1口でぱくりと食べると、酸っぱみは和らいだ。この瞬間からインジェラの色も、内臓のような気泡も気にならなくなった。後に、インジェラの栄養価が米よりも高いことを知った。



論、食べ方にはルールというかマナーのようなものがあった。右手でインジェラを6~7 cm位四方に千切り、そのままワットを覆い被せるように5本指で摘む。これを大きく口を開き1口でぱくりと食べると、酸っぱみは和らいだ。この瞬間からインジェラの色も、内臓のような気泡も気にならなくなった。後に、インジェラの栄養価が米よりも高いことを知った。

インジェラは日本になく初めてだということ、「美味いだろう!」の言葉と、「日本では何を食べているのか」の問い掛けがあった。

### <コーヒーセレモニー>

エチオピアはコーヒーの発祥地である。モカ コーヒーで親しまれているコーヒーの主産地はエチオピアであるが、名称はイエメンの港町モカから輸出されるコーヒーにつけられた。エチオピアでのコーヒーは、カフェ、レストラン、博物館の中庭、市場の露天と、どこでもあらゆる階層の人々に親しまれている飲みものであった。

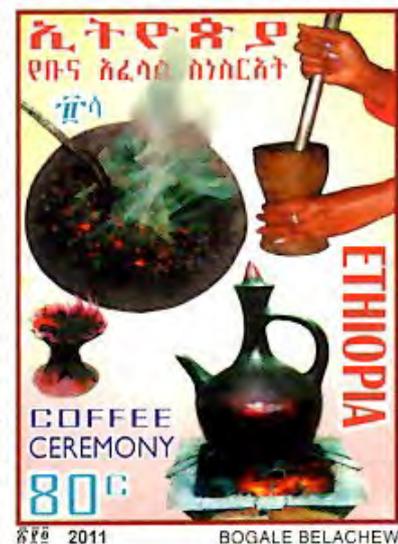
セミアン国立公園へ玄関口で宿泊したロッジと、ゴンダール郊外のシングルマザー授産施設の2ヶ所で、日本の茶道に似たコーヒーセレモニーのもてなしを受けた。また、宿泊したホテルやロッジのドアボーイから、何度となくにこやかにうなずきながら一礼された。日本の習慣をまねているのかと思ったが、後にエチオピアの習慣であることを知った。エチオピアに根付く2つの生活様式が、どこか親しみを感じられる国への橋渡しになった。

コーヒーセレモニーは、単なる飲む習慣を越えたものであった。セレモニーの舞台は、コーヒーテーブルの下に緑の草が敷き詰められ、自然の雰囲気づくりから始まる。コーヒーカップ、それを載せるテーブル、七輪コンロのような火鉢など必要なものが用意され、雰囲気を盛り上げるためだろうか乳香が焚かれる。セレモニーの主役は女性、ほとんどの場合一家の主婦が務めるという。ゲストたちは主役の女性を囲むように半円形に腰を下ろす。

シミアン国立公園への前後に宿泊したロッジオーナーの奥さんは、普段はジーンズ姿だったが、

民族衣装に着替えていた。低い椅子に座り、火鉢に炭火を熾しながら、凹形の平鍋に生豆を入れ、水を注ぎ、もみ洗いが始まった。3度ほど繰り返した後に、長さ25cm、底辺5cm程のL字形金属の道具で濡れた生豆を乾かし、茶褐色になるまで炒る。コーヒーの香りが漂い、均等に色付くと各自にコーヒー豆の香りを楽しませてくれた。

やかんで湯を沸かす間に、木製の鉢に豆を入れ、鉄製の棒で突いて粉末状に砕く。湯が沸騰すると、カップに注ぎ温めると同時に、蓋のついた鍋でポップコーンをつくってみんなに配られた。火鉢に再度乳香を焚き、甘い香りがたちこめる中で、底が広く細長い注ぎ口のポットのお湯に粉にし



たコーヒーを入れる。分量は15人に対して大サジ12杯とかなり多目だった。注ぎ口を何度か沸騰させてからポットを斜めに置き、滓を沈めてから、小さなカップに注いでくれた。そして、「ようこそお出でくださいました。どうぞコーヒーをお楽しみ下さい！」の歓迎の言葉とともにコーヒーが各自に配られた。これに各自が好みによって砂糖を入れていただいた。カップが小さいので2杯、あるいは3杯と振舞われるが、コーヒーは意外と濃かった。最後に、主賓あるいは長老が主役の女性に対し感謝と祝福の言葉を述べて終了だった。およそ1時間に及ぶ優雅な一連の所作は、日本の茶道、茶会よりも気軽に行われており、人々の間に深く根付いている伝統文化であった。

### <ナイル川の産声>

ブルーナイル滝、別名ティス アッバイ、煙の父の意味を持つ滝を、広く世界に紹介したのがスコットランドの探検家ジェームスブルースである。滝の入口で車を降り、トレッキング気分で行き先を30分ほど歩いた。渓谷に架かる苔むしたアーチ型の石橋、「ポルトガル橋」があった。1619年建造ながらいまだ現役で、布を肩にかけ、荷背負いに棒を肩にしたエチオピアスタイルの労働者が行き交っていた。



何処からともなく「ゴォー」という地響きに似た音が聞こえてきた。突然、茶色に濁った水が



エジプト農業を支えたエチオピア高原



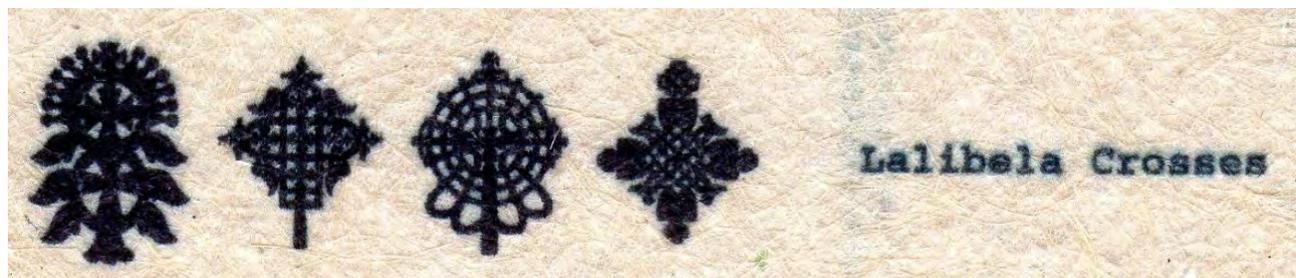
ナイルの産声 ブルーナイル滝

崩れ落ちる巨大な瀑布、ブルーナイル滝が現れた。雨季には滝幅が 400m にも広がるという。30 km 上流のタナ湖から溢れ出た水が 50m 落下する音がナイル川の産声であった。繁茂する木々を背景にした眺めも良く、しばらく見惚れてしまった。

エチオピア北部阿克苏ムからアディスアベバに向かう機上から眺めたエチオピア高原には、樹枝状に深く、険しく浸食された峡谷が刻まれていた。その最大のものがエチオピア高原のほぼ中央部を流れる青ナイルで、ここで浸食された土砂が 1,000 km 以上もナイル川によって運ばれ、「ナイルの賜物」としてエジプトに古代文明を開花させた。

## <第2のエルサレム ラリベラ>

標高 2,700m のラリベラ岩窟教会群は、エチオピアを代表する世界遺産である。ある本に「文句なしの世界遺産」と記されるほど世界の石造建築史から見ても重要な建造物であるという。12



見慣れた十字架と異なるエチオピアクロス（絵葉書から） 地域によっても違っていた

世紀から 13 世紀にかけて支配したラリベラ王が、夢の中で啓示を受け、「この地に第 2 のエルサレムにするように！」という命によって建造されたと言われている。

当時のラリベラは、イスラム教徒に包囲されてエルサレムへの巡礼が出来なかった。建造の際、

王は天使の助けを得て巨大な岩をくり抜いたとされているが、信心深いキリスト教徒が簡素な道具を使い、辛抱強く手作業で凝灰岩、soft volcanic tuff の岩を彫ったのだろう。実際、教会の表面には鑿の跡が鮮明に残っていた。建造時期については不明なこともあるようだが、エジプト人の指導の下で、2万人が24年もの歳月をかけて完成させたといわれている。ガイドの説明によると教会群は、天国のエルサレム、地上のエルサレム、ノアの方舟のエルサレムの3群に分かれており、それぞれがトンネルで繋がっているという。また、キリストが誕生した馬小屋、洗礼を受けたことを示す岩の十字架が河岸に建つヨルダン川、昇天したとされるオリーブ山など聖書の中の様々な地名が再現されていた。



建造時期を日本に当てはめると、平安から鎌倉の頃である。石の彫刻である教会群が、中国でもヨーロッパでもないアフリカの一角にあることが不思議だった。なだらかな斜面の地面の岩を掘り抜いただけでなく、部屋も窓もあり外壁には凝った彫り物もあった。インドデカン高原のエローラ石窟寺院に勝るとも劣らない規模だが、エローラのように主役が姿を消した遺跡ではなく、一日のお祈りから始まる礼拝の場であり、800年前の礼拝の形式を殆ど受け継ぎ、今も息づく人類の貴重な財産が、ラリベラの岩窟教会群であった。

ラリベラ1の規模を誇る聖救世主教会、王家の礼拝堂だったとされる聖エマニュエル教会と回ったが、どこも天井は高く、岩の中に居ることを忘れてしまうほどだったが、イタリア占領時の破壊痕を示された時は、10年ほど前イスラム過激派タリバンによって破壊されたアフガニスタンのバミヤンの仏像や今も爆撃の続くシリアでの無意味な破壊行為が脳裏を過ぎった。

最後は聖ギオルギス教会で、他の教会群から少しはなれて地面にぽっかりと台形状の穴が開いていた。穴の中には岩の大きな十字で、教会の天井であった。つまり教会は十字架の角柱をしていた。岩盤の一枚岩を12mも掘り下げて、大きな十字架の形に掘り出し、さらに内部の岩をくり抜いて造られていた。内部に柱はなく、ノアの方舟を象徴しているとの説明があったが、自分の理解の域を超えていた。

### <エチオピアの故郷> — アクスム

アクスムはエチオピア文化の発祥の地である。伝承によると、ここアクスムにシバの女王が住んでいたとされ、女王の宮殿跡、女王の子で、エチオピア初代国王メネリック一世の墓、更にはエルサ

レムから運ばれてきたとされるモーゼの十戒を刻んだ石版を納めた契約の箱アーク、カレブ王の墓、エザナ王の碑など紀元前後の遺跡も多い。

シバ王国は農耕の発達や中継ぎ貿易で繁栄していたが、女王は個人的な悩みを抱えていたという。誰かに相談したいと思っていた時に耳にしたのが、大変な知恵者としての誉れの高いソロモン王だった。女王は王の知恵を頼って金銀財宝、乳香、白檀などを手土産に王を訪ねる。ソロモン王（BC 965～926）との知恵比べに負け、ソロモン王の子を宿し、エチオピアに帰ってからメネリク一世を産んだ。そして、メネリク一世の血をひくのが阿克苏ムの王族だという。

市街地とオベリスクのある公園との間に、新しいシオンの聖マリア教会と伝説のアークが納められているシオンの聖マリア教会が隣り合っていた。礼拝を終えたおびたしい数の老若男女が、新シオンの聖マリア教会から出るのを待って中に入った。ステンドグラスの美しい大きな建物だった。シオンの聖マリア教会が女人禁制のため全ての民衆のための教会として、ハイレ セラシェ皇帝が建てた教会だという。多くの宗教画の中にモーゼの十戒を刻んだ石版を納めた契約の箱、アークをメネリク一世の従者がエルサレムから持ち帰る様子を描いたものがあった。このアークがシオンの聖マリア教会でいまでも保管されているとエチオピア正教会は言い続け、国民はそれを信じきっている。そして、数世紀に代々エチオピア皇帝が礼拝する同



国最高の聖地であり、重要な巡礼地となっている。しかし、それを見てその状況を語った人はいない。選ばれたたった一人の司祭が生涯守り続けるのだという。一般人は教会の外観を眺めるだけだった。

### <乳香( Frankincense )>

乳香は、アラビア半島原産の香料である。原料はカンラン科の木の樹脂であり、日本の松脂、ロジンのようなものといえる。キリストが誕生したとき、東方の三賢人、ガスパール、メルキオール、バルタザールが訪れ、金と乳香と没薬の贈りものをしたとされている。古代エジプトでは、「神に捧げる香」として知られているし、古代ギリシャやローマ帝国では清め、医薬品そして香料として利用されていた。

シバ王国は、今日の紅海を挟んでイエメン、エリトリアそしてエチオピアに及んでいた。ここのシバの女王が、ソロモン王の知恵を頼って訪ねた時に乳香を持参した。日本へは754年唐の僧、鑑真が仏教の祭祀用として持ち込んだとされている。

ゴンドールで宿泊したロッジの前庭に東屋があった。時折コーヒーセレモニーが行われる様子で、小さなテーブルと共に火鉢と乳香が置いてあった。ロッジのスタッフに乳香のことを尋ねると、ゴ

ンダールでの購入をすすめられ、痩せ型で長身の男を紹介してくれた。

黄色で粒の揃った乳香を袋から取り出した。途端に樟脳のような木から採取したというウッディーな香り、爽やかな香りがした。しばらく値段の交渉が続き、やっと手を握り合って成立し、持ち帰ることができた。

火鉢で焚いているが、大粒の塊をそのまま焚くと、もうもうと煙ばかりが出てきて、良い香りは少しも楽しめない。松脂のような香りもするし、酸味のある香りもする。感じ方は人それぞれようだ。世界で最も高価な香水とされるアムアーシュは乳香を主成分としているとのことだった。時が経つにつれて香りが強くなるともいわれているので気長に待とうと思っている。

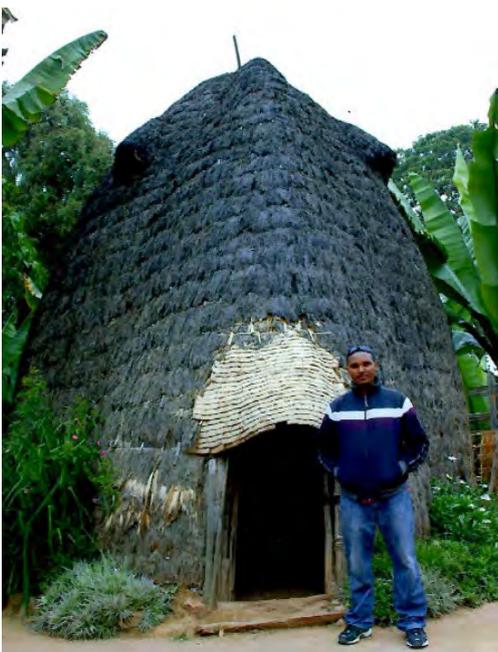


### 南部の少数民族

オモは少数民族が暮らす地域で知られている。中心はオモ川でエチオピア高原の標高 2,000m を水源とし、標高 500m のケニアのトゥルカナ湖へと注いでいる。この下流域からアウストラロピテクスなど最古の人類の化石が出土した。学術的に貴重な地域として世界遺産に登録された。オモ川は 8 月から 9 月にかけての雨季に洪水を起こし、エチオピア高原の肥沃な土が運ばれてくる。ここにハマル族、ダサネッチ族など多くの民族が農業を営みながら、昔からの生活様式で暮らしている。

### <ドルゼ族>

少数民族の中継地、アルバミンチへ向け出発した。首都から 540 km、車道はアフリカ大地溝帯の真っ只中に伸びていた。二つの湖が見えてきた。途中、バナナ、マンゴー、パパイヤの大規模農場



右上：ドルゼ族のシンボル模様

左：ドルゼ族のソウの顔に似た家屋

が望まれ、豊かな田園風景が広がっていた。チェンチャ山頂近くのドルゼ族村は、子どもたちが走り回り、草原の斜面では牛が、羊が草を食み、大人たちは腰

を下ろし談笑していた。何とも牧歌的なところだ。この辺りの家屋は、象の顔を模したような独特の形をしていた。材料は竹とエンセーテ、偽バナナの葉で、高さが 10m に達する円錐形の巨大住宅だった。内部に入れてもらった。ちょっと頭を下げるだけで通れる大きな入口で、小さな窓しかなく暗い。中央部に炉があり、2/3 がベッド、残りが家畜、牛小屋、2階はベッドと倉庫というか食料保管場所だった。

家主の後について家屋の背後に廻ると、女性が綿花から糸を紡いでいた。慣れた手付きだ。均一の太さにするのはとんでもなく難しく熟練された職人技に思えた。機織は男の仕事で、村落入口を飾っていた赤、黄、黒の縞模様はドルゼ族のシンボル模様だという。

家主の後について家屋の背後に廻ると、女性が綿花から糸を紡いでいた。慣れた手付きだ。均一の太さにするのはとんでもなく難しく熟練された職人技に思えた。機織は男の仕事で、村落入口を飾っていた赤、黄、黒の縞模様はドルゼ族のシンボル模様だという。

また、別の女性がエンセーテの巨大な葉の根元を棒切れで削いで繊維と葉肉に分けていた。繊維は織物に、葉肉はエンセーテの葉に包み 2~3 週間土中で発酵させてから焼いて食料にするのだという。エンセーテは、偽バナナといわれだけに、外見はバナナの木そっくりだ。しかし、バナナは 1 株に 1 房の実をつけると枯れていくが、エンセーテは多年草で年中いつでも利用できるというのが、主食となる所以なのだろう。土中から出したては、チーズの匂いと共に酸っぱい香りを漂わせていたが、丁寧に繊維を切り、薄く延ばして鉄板で焼いたものをピザ生地と呼んでいたが、見た目も、食感もピザ生地そのものだった。



ドルゼ族のピザ生地焼き

## <コンソ族>

チャモ湖から続く平坦地は、視界の限り緑に覆われていた。ぽつんぽつんと白いものが見える。

政府の綿花農場だという。アップダウンを繰り返しながらも標高 1,000mを保ってアルバミンチから南へ 92 km、コンソに着いた。コンソ族の集落は緑豊かな山の斜面に、草葎の丸屋根が点々としており、2ヶ所から細々と煙が立ち昇っていた。近づくと石垣が見えてきた。

街の中心部は、無秩序に車が集まり、行き交う人の波に埋まっていた。コンソの集落に入るには、ツーリストオフィスで入場料を払い、



ローカルガイドを雇わなければならなかった。コンソ族の集落は、雑踏の街から離れて山の上にあった。集落全体が石垣と木の柵に囲まれており、共同体をつくっていた。1人がやっと通れるような狭い入口から、磨り減った石の細い通路が延びていた。両側は民家で、柵で1軒1軒無造作に区切られているが、申し合わせたように丸屋根を二つ重ねたような同じ造りで、高床式の下は家畜小屋だった。

お互いに譲り合わないと通れない通路で、水を背負ってきた女の子に出会った。はにかんだ様な笑顔は絶好の被写体だったが、カメラを出すまで待ってくれと言うには気の毒な重さに見えた。広場にはモラと呼ばれている集会場があり、端に死者の記念木像のワカが建っていた。集落全体が慎ましやかに暮らしている感じだった。

### <ダサネッチ族>

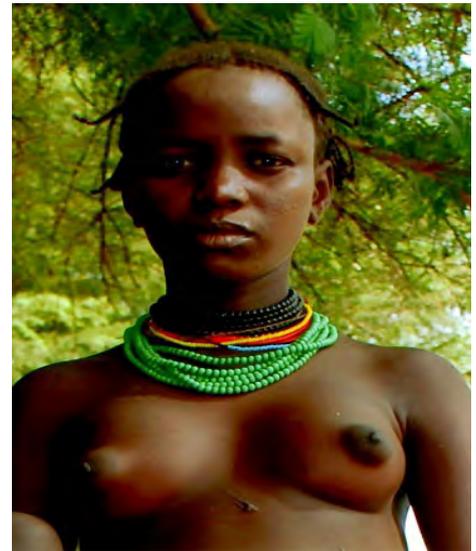
ドライバーが、鍋の底のように暑いというトゥルミ経由でオモラテ村に向かった。先ほど小雨が降った。太陽は厚い雲の中で、今日は最高のドライブ日和だという。最短コースを避け、標高 1,400 mの山道を選んで走った。サバンナを切り開いただけの車道は赤土が舞い上がる。よちよち歩きのホロホロ鳥の群、用心深いジャッカル、ヒヒの仲間の親子バブーンなどの野生動物たちが姿を現した。

南スーダンとケニアの両国とは目と鼻の先で、パスポートチェックがあり、オモラテ村に入った。

ここは人類発祥地の一つであり、今なお 50 近い民族が独自の生活文化を持ち続けていることから「生きた民族博物館」として世界遺産に指定された。



大通りと平行してオモ川が流れていた。川幅 30m位だろうか。エチオピア高原の土を溶かし込んだ水は茶褐色に濁っていた。ダサネッチ族の村は対岸だという。船着場は土の斜面に掘られた足場



のみ。舟は丸太を割り抜いただけのもので、ガーギと呼ばれていた。

ダサネッチ村は別世界だった。川辺の畑の背後は乾燥した平地で、円形の小さな草葺家屋が見えてきた。突然、上半身裸の若い女性が現れた。カラフルなビーズを何重にもしてネックレスにしていた。そもそも彼らは放牧民であったが、オモ川下流のトゥルカナ湖に追い詰められ漁労も農業もやるようになったという。放牧も細々と続けているが、近年の干ばつが酷く容易でないらしい。集落への立入りは自由で、子どもたちが集まってきた。老人も出てきた。彼らにとって、写真代が手取り早い現金収入源だった。人類発祥地に今も生きつづけるダサネッチ族は、私たちが遠い昔に失ってしまった厳しい生活環境で生きる力を、まだまだ持ち合わせていた。

### <ハマル族>

トゥルミに引き返し、遅い昼食のためツーリストホテルに立ち寄った。日本人2名、韓国人1名、台湾人1名の若者がまどろんでいた。日本人の1人は大学生で22歳、女子は26歳で、ケープタウンから旅を始めて1年数ヶ月過ぎたという。スパゲティで空腹をみだし、近くで開かれている月曜市に出かけた。

市場に並べられた品物は、生活用品のヒョウタン、素焼きの壺、携帯椅子などなどの他に白トウモロコシ、塩のブロックなどの食料、観光客を意識したお土産ものや



装飾品は敷物に並べられていた。買い物客はほとんど見えない。ハマル族は赤黒い体で5~6人、8~9人が寄り添い、みんなおしゃべりに興じている。見ていて楽しそうだ。市場は物の売り買いよりも交流の場のようなようであった。

中央に腰を据えて頭髪を赤く染めあげているハマルの叔母さんと娘さんをしばらく見入ってしまった。自分の心の中で求めていた少数民族そのものだったが、強烈過ぎて腰が引けているのがわかる。ゆっくりゆっくり市場を一回りし、記念に小さなビーズで作ったミサンガをやっと買い求めた。

### <ムルシ族> — 下唇に入れた皿が大きいほど美人

ムルシ族は国立公園内に居住を許されている唯一つの民族だという。山道から見下ろすマゴ国立公園は広大な緑の平原であった。公園入口から銃を持ったガードマンが同行した。原生林を切り開いただけの幹線道路を進むこと1時間で再び山道になった。傾斜が緩くなったところから草地に伸びる轍を進むと、上半身裸の男が5、6人たむろしていた。その奥に鳥かごのような家屋が見えた。

ガイドから注意があった。これから家屋群を通り抜け、高床式の倉庫まで行って引き返してくるが、その間に何を言われても笑顔を返すように。写真は後にするように……だった。先頭がガイド、後ろが銃を持ったガードマンの3人で家屋の間に歩を進めた。家屋は小枝を無造作に組み、枯れ草をたてかけ、人が1人か2人が横になれるかどうかの簡素なものだ。入口は小さく、腰を屈めただけでは入れそうもない。そもそもムルシ族は遊牧民で家畜の餌を求めて移動していたのだから、粗末な家屋も納得できる。

丁度12:00だった。昼食の習慣があるのかどうか解らないが、家屋前でアワ科のテフ、インジェウの原料を石で挽いていた。カボチャを煮ている女性、コーヒーを煎じる女性と日常生活が繰り広げられていた。女性たちの周りには全裸の子ども寄り添い、無表情で食事の準備をしていた。彼女たちは唇に皿を嵌めていなかった。横一文字に切られ、伸ばされた下唇はだらりと垂れ下がっているのを横目で見ながら進んだ。

ムルシ族の特徴は、結婚前の女性が下唇の下に切り込みを入れ陶器の「皿」をはめていることだ。口の周りだけでなく、耳たぶにも切り込みを入れ、目一杯に陶器や木製の皿をはめ込んでいた。また、腕や胸、背中に傷をつけ、その痕が盛り上がり模様になっている人もいた。更に、老若男女を問わず灰を体や顔に塗っている。これらがすべて化粧、お洒落なのだろうが、部外者にはあまりにも強烈過ぎる。

それにしても、何故このようなことがお洒落なのか、考えてしまう。お洒落になる以前に、どう



も止むにやまれぬ理由があったらしいことを、野町和嘉氏の写真集「バハル」(第3回土門拳賞受賞)で知った。有力な説の1つが、奴隷商人から女性を守るため、もう1つは、周辺部族の略奪から女性を守るための、追いつめられた末のぎりぎりの選択だった。そして、グロテスクに変わり果てた姿を、美しいと言いくるめて子孫に語り継いでいったのだという。ガイドによると、今日では、政府が唇を切って皿を入れることを禁止しているという。消毒をまともにやっているとは到底思えないし、かなりの危険を伴うのは確かである。ということは、この奇習を見られるのもあと数10年ということだろうか。

## 南アフリカ(南アフリカ共和国)

### アパルトヘイトからレインボーネーション

今日の南アフリカの地に最初に住み着いたのは、狩猟採集民族のサン族（旧称ブッシュマン）や牧畜民のコイ族であった。その後、15世紀頃に北から農耕民族のバンツー系アフリカ人、黒人が移動してきて定住し始めた。17世紀に入るとヨーロッパから移住してきたオランダ人によって植民地にされてしまう。その後、移住してきたのがイギリス人で、オランダ人をボーア人、オランダ語で「百姓」と呼び、植民地を武力で奪い取ってしまった。

イギリス支配を嫌ったオランダ人は、北部に移動しアフリカ先住民の土地を占領してしまう。その土地からダイヤモンドと金が発見されると、ボーア人（オランダ人）とイギリスとの争い、「ボーア戦争」を経てイギリスの植民地となる。1910年、イギリスは南アフリカ連邦として独立させるが、イギリス系が支配層を形成し、オランダ系は経済的な弱者となり、貧困層を形成するようになる。これら白人貧困層救済と保護、及び自分たちの権利確保から非白人への差別が始まった。

第2次世界大戦後、南アフリカ政府は人種隔離政策である「アパルトヘイト」を法律、軍隊と警察の力で押し進めた。1952年以降、マホトマ ガンジーの影響を受けた黒人たちが不服従運動を始めたが逮捕、1960年にはシャープビルの警察署前に集まった黒人の群集に向かって警官隊が一斉射撃を行ない69人が犠牲になった「シャープビル事件」が発生、この事件の後、10,000人以上の黒人活動家が逮捕された。さらに、1976年には、学校教育で使われる言葉をオランダ系言語とすることへの黒人学生の抗議行動に対して政府は500人以上の黒人を殺害するなど徹底して弾圧した。

これらの弾圧に対して国際世論の反発が強く、南アフリカはイギリス連邦から脱退し、立憲君主制から共和制となり、国名を南アフリカ共和国とした。1970年以降オリンピックへの参加を拒否



ロベン島に収容される政治犯（ロベン島の写真）

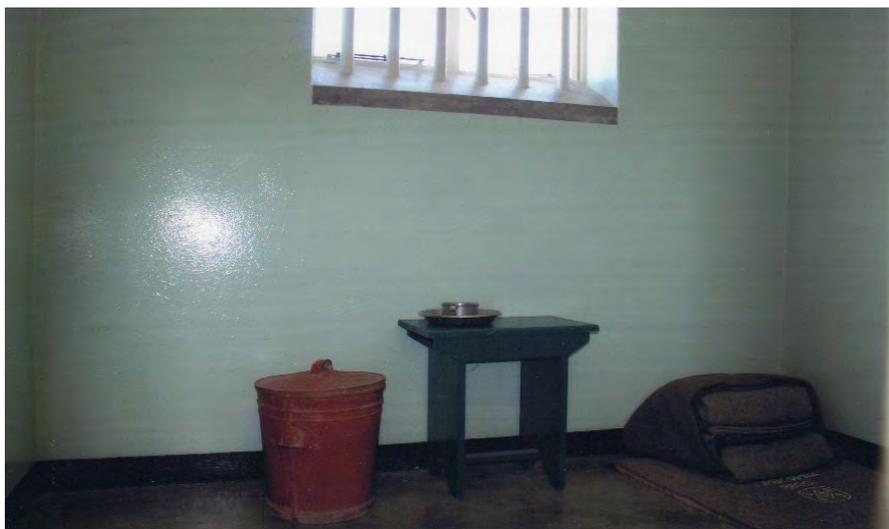
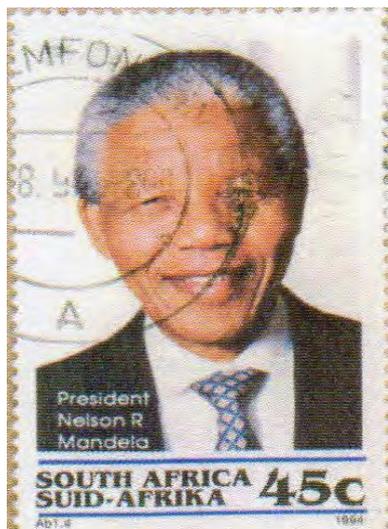


ロベン島へ（左上霞んでいる）

され、世界的孤立の中でもアパルトヘイトを続けた。これに反対する国民は政治犯として、前に流刑地、ハンセン病患者が隔離されていたロベン島に強制収容された。ケープタウンの沖12kmだが、海流の流れが速く脱出不可能なところから「監獄島」とも呼ばれていた。現在は政府が管理する博物館として一般公開され、世界遺産（文化遺産）に登録されている。

1989年、イギリス系白人のデクラークが大統領となると、次々と劇的な人種隔離政策に関する改革に乗り出した。まず、黒人の人種隔離政策反対運動の指導者であるネルソン マンデラ氏<sup>(\*1)</sup>を27年ぶりに釈放し、アパルトヘイトに関する法律を撤廃した。

1994年には、南アフリカ初の全人種参加による選挙が実施された。その結果、黒人のマンデラ氏が率いるアフリカ民族会議が第1党となり、大統領就任式典の記念講演で、白人を追い出すこともなく、黒人も白人もカラードも少数民族も互いに違いを認め、11の公用語を採用し、違いを尊重した国家を建設する「レインボーネーション」（虹の国家）建設を高々に宣言した。さらに、96年、死刑の廃止や女性や同性愛者へのあらゆる差別を禁止した最もリベラルな憲法を制定した。人口は約5,565万人で、黒人79.2%、白人9.2%、カラード<sup>(\*)</sup>9.0%、インド・アジア系2.6%（2016）となっている。首都はプレトリア（行政府）、ケープタウン（立法府）、ブルームフォンテン（司法府）の3都市に分散している。



ネルソン マンデラ氏

マンデラ氏の独房（左：赤い缶はトイレ、右：寝具）

（\*1）ネルソン マンデラ（1918～2013） 南アフリカの政治家、弁護士。1964、南アフリカの人種隔離政策に反対する活動が国家反逆罪となり、終身刑でロベン島に収監された。27年に及び獄中でアパルトヘイトの主要勢力であるアフリカーナーとの対話を予測し、アフリカーンズ語を習得した。南アフリカで民主的に選ばれた最初の大統領で、ノーベル平和賞を受賞した

（\*2）カラード ヨーロッパ系白人とアフリカ系黒人あるいはアジア系との混血をさし、南アフリカ共和国内の黒人達と同様に人種差別を受けていた

### <負の世界遺産 — ロベン島>

ロベン島は、南アフリカ共和国の喜望峰に近い小島である。周囲は潮の流れが速く、脱出困難なことから、オランダ植民地時代以降、流刑地として使われてきた。19世紀、イギリスの統治下になってからもアパルトヘイト、有色人種隔離政策に反対する政治犯などが送り込まれた。

この島に18年間収監されていたのが、後に初代大統領となりアパルトヘイトからレインボーランへと導いたのがネルソン マンデラ氏である。彼によれば、この監獄でいろいろな思想を持った人々と共存する機会を得たことで、後のアパルトヘイト撤廃につながる国際世論を動かす原動力になったという。

現在ロベン島は、博物館になっている。島内には、二重の柵と高さ5mの石壁に囲まれた刑務所、聖堂、灯台などが残っており、元囚人や元看守が案内役を務めている。元刑務所の建物には、ネルソン マンデラ氏が投獄されていた部屋も残っていた。

この島を訪れたオバマ大統領は、風が強く砂埃が舞う島をひと通り見て回った後、訪問者ノートに書き記している。



収容所内部から見た塀と監視

「勇敢な男たちが不公正に果敢に立ち向かい、決して屈しなかった場所に立ち、私たち家族は身の引き締まるような思いです。世界はロベン島の英雄に感謝しています。あなた方は、どんな足かせも監獄も人間の不屈の精神力にはかなわないことを私たちに思い出させてくれる」  
また、マンデラ氏は述べている。

「生まれたときから、肌の色や育ち、宗教で他人を憎む人などいない。人は憎むことを学ぶのだ。もし憎しみを学べるのなら、愛を教えることもできる。愛は、憎しみに比べ、より自然に人間の心にとどく」

ロベン島は、「負の世界遺産」、過去の人間の過ちを忘れないための遺産として日本の「原爆ドーム」、ポーランドの「アウシュヴィッツ ビルケナウ ナチスドイツ強制収容所 1940-1945」、セネガルの奴隷貿易の拠点「ゴレ島」などがある。

### <タウンシップ>

ケープタウン郊外にタウンシップ、黒人居住区が広がっていた。アパルトヘイト時代からの黒人居住地域である。アパルトヘイトが撤廃後は他の居住地域に住むことも可能だが、経済的な理由からタウンシップに住み続けているという。多くの家屋は、アパルトヘイト撤廃後に政府が建てた一戸建てであった。

ガイドが案内してくれる住宅に徒歩で向かう途中、子供たちに囲まれた。表情が明るく、手を繋いで歩いた。家屋内部はペンキで塗装されたコンクリート壁、カーペット敷きの床だった。エアコンはないが、冷蔵庫、ガスレンジなどが揃っており、アパルトヘイトからくる暗いイメージはなかった。子どもたちもものを強請ることもなく、純粋に人との触れ合いを求めているように思えた。

気になったことは、タウンシップの端に、只で手に入るもので組み立てたに過ぎない粗末な家々、ホームレスの人々の居住区域が広がっていたことである。市は先の公共住宅への入居を勧めているがなかなか進まず、タウンシップの住人の半数以上が住んでいるという。ホームレスの人たちも選挙権をもち、80%は仕事についているという。勿論、家賃なんていうものはなく、水道とトイレは共同だがフリーだという。電気は街灯から引き込み、さらにそこから枝分かれしているので、電気

G.P.-S.18864-1973-74-100 000 (M-S) (7)		G 353	
GEVONNISTE GEVANGENE SENTENCED PRISONER			
Groep Group	B. H. / / /	No. 69/64	Raad No. 1/5341.
Geloof Religion	Hindu	Board No.	
OPMERKINGS REMARKS		Naam Name	Billy Nair.
		Misdaad Crime	Sabotasje.
		Vonnis Sentence	20 Jaar G/S.
		Datum van vonnis Date of sentence	28/2/64.
		Datum van ontslag Date of discharge	27/2/64.
DUIM-DRUK—THUMB IMPRESSION			

右側 2 段目に収容理由が記されていた

代を払っている人はいないのでは…と語ってくれた。治安は、自家製ビールでコミュニケーションがとれており、みんなが助け合っているので全く問題ないという。

### <民族のるつぼ>



ケープタウンの街に出ると、南アフリカが多民族国家であることがよくわかる。繁華街はヨーロッパのような街並みを黒人と白人が入り混じって歩いている。マレー地区になるとモスクがぽつぽつ目立ち、スカーフで頭髪を覆った女性が多くなる。とは言っても宗教色はほとんどなく、建物の多くはパステルカラーでとてもカラフルだ。

歴史を見ると、オランダとイギリスを中心にドイツなどヨーロッパから多く開拓者がやってきて支配した。オランダ人は植民地だったインドネシアから、イギリス人はインドから料理人はじめ使用人を連れてきた。その結果、黒人、白人、カラート（混血）、アジア系と七色の国民すなわちレインボーネーションと呼ばれるようになった。それは料理にも表れている。アフリカ伝統的なスパイシーな肉のソーセージ、インドネシア料理が起源だという南アの国民食とも言われるグラタンのようなミートローフのボボティ、インド料理を思い出させスパイスの効いたカレーなどの店が街に溢れている。これに加えて、新鮮な魚介類は地中海料理になり、アフリカらしいダチョウのカルパッチョ、牛の仲間スプリングポックのステーキといろいろな料理が揃っていた。

### <喜望峰とバスコ ダ ガマ>

2010/10、喜望峰自然保護区のトレッキングを楽しんだ。色とりどりの花が咲き、チンチラを少し獰猛にしたようなイワハイラックス、ダチョウ、ヒヒの仲間バブーンなどの野生動物の生活の場でもあった。小さな岩山を登り、反対側の急坂を下ったところが駐車場で、バスと車から吐き出された人の群れは一斉に標識に向かうのが望まれた。茶褐色の標識には黄色のペンキで「喜望峰-アフリカ大陸南西端」と書かれていた。およそ500年前、バスコ ダ ガマが見たであろう風景が広がっていた。インドを旅した折、マラバル海岸のコジコーデ、別名カリカットに立ち寄った。ガマのインド上陸地点である。点と点が結ばれた感じで胸騒ぎに似たものを感じた。

喜望峰一帯は、「嵐の岬」と呼ばれ、船の墓場として恐れられていたが、インド航路開拓を機にポルトガル王が「喜望峰」、インド航路発見に希望を抱いての命名だという。ここを文字通りの「希望の岬」に変えたのがポルトガルであった。ヨーロッパ人として始めてインド航路の開拓によって、

ポルトガル海上帝国の基礎が築かれた。

確かに岬に立ってみると大海原の驚異とそこに果敢に船出した人々に感動を覚える。ガマのインド航路をたどってみると、岬から直接インドへ向かったのではない。大陸東海岸に沿って北に進みながら何度も上陸しては体を休め、飲料水を補給して4月中旬にマリンデーに着いた。ここでイスラム教徒の船乗りを雇い、しばらく滞在し南西の風、即ち夏のモンスーンが吹き始めるのを待ってインドイに向け船出している。



バスコ ダ ガマ (発見のモニュメントより)



喜望峰

ガマは3カ月間インドに滞在した後、香辛料を積み込み帰国のため出航した。ポルトガル出発の時147名ほどであったが、すでに60名ほどが死亡、残りも健康状態は悪いものばかりであった。帰国の途中、乗組員の不足のためにサン ラファエル号を廃棄して1499年に55名で帰国した。

### <歴史体現ケープタウン>

ケープタウンは、テーブルベイとテーブルマウンテンを中心とする岩山に縁取られ、近代的なビルが建ち並び、世界に存在感を示す大都市である。南に伸びるケープ半島を「地上で最も優美な岬」と称したのは、マゼランに次いで世界一周を成し遂げた海賊あがりのイギリス人、フランシス・ドレークだった。

ケープタウンは、インド洋と大西洋、即ち東と西、アパルトヘイトとレインボーナンの新と旧、再開発地ウオータフロントと鉄道駅裏のスラム、大都市の喧騒が渦巻く大通りと隣合せたカンパニー・ガーデンズの静寂と、相反するものが混在しながら、全体として調和のとれた緑豊かな街だった。その歴史は、1652年、ヤンファンリーバックがオランダ東インド会社から派遣されたのが始まりである。会社から彼に託されたことは、港を保護する要塞を造ること、寄港する船舶に新鮮な野菜を供給するための野菜園を造ることの二つであったという。これらは今日でも都市の中心となって残っている。野菜園はカンパニー・ガーデンズと名を変えている。



カンパニー・ガーデンズにて

市内で最も賑やかなアダリー通りの外れにある。公園内の木立の中にレストランがあり、重厚な教会あり、白亜の国会議事堂、図書館、博物館と連なり、ヨーロッパの一角を彷彿させるところだった。あらゆる肌の地元民、観光客、老若男女を問わず

日向ぼっこをし、リスや鳥に手から直接餌をやりながらくつろげる所だ。もう一つは、同国最古の建物とされているキャッスル オブ グッド ホープ、いわゆる城砦である。東インド会社総督の居城となったところで、高さ 10mほどの城壁が星形に張り巡らされていた。現在も西ケープ陸軍司令部として現役だった。建物二階は軍関係の博物館となっており、制服、勲章などが展示されていたが、2010年のサッカーワールドカップを彩ったコスチュームや記念品の一角が一際明るく、人々の間に溶け込んでいる感じを受けた。

公園を覆い尽す木々、城砦中庭の芝生の緑、テーブルマウンティン上空に広がる青空は、最適気候とされる地中海性気候区の鮮やかさに溢れていた。

## <ワイン>

ケープタウン周辺は地中海性気候のため、ヨーロッパからブドウの苗を持ちこまれた。南アでは元々ワイン造りが盛んだったが、アパルトヘイトによる経済制裁で輸出はほとんどなかった。近年、ヨーロッパからの資本が入り、生産量も輸出量もうなぎ登りに増えている。国連食糧農業機関の1906年の統計によると、ワイン生産量は101万tで世界第8位。値段が安く、同じ品質のワインなら日本の1/3以下で買える。気候を生かして、ワインだけでなく、オリーブオイルや柑橘類、チーズの生産も増えており、品質の割りにリーズナブルな価格のため、人気を呼んでいる。



ケープタウン郊外のブドウ畑

## 世界有数の鉱産資源国

キンバリーの北西部に直径500m、周囲1,600m、最深部約1,200mの巨大な穴がある。これは金の露天掘りの結果できた穴で、人間が掘った世界最大の穴といわれている。南アフリカは、金、ダイヤモンド、マンガン、クロム、白金、石炭、鉄鉱石などの鉱産資源に恵まれ、それらの世界有数の産出国である。

なかでも、南アフリカの金産出量は、第2次世界大戦後の最盛期には世界の約70%を占めていた。最近では約25%に低下したが、それでも世界1の金産出国である。また、南アフリカは、オーストラリア、ボツワナ、コンゴ（キンシャサ）と並ぶダイヤモンドの主要産地であり、中心はキンバリー付近で、1905年にこぶし大もある3,106カラット（約620g）の世界最大のものを産出した。

クロム、マンガンなどの金属は、世界全体での産出量が少ないことから、希少金属、レアメタルとよばれている。これらは、現在の先端産業には欠くことのできない重要な金属であるが、南アフリカはマンガン、クロムともに世界1の産出国である。世界の先進工業国では、これらの鉱物資源の安定供給が不可欠であり、供給先としての南アフリカは重要な役割をもつ。アパルトヘイト時代、国連を中心に経済制裁が実施されたにもかかわらず、ヨーロッパ諸国や日本の経済制裁が遅れたの

は、これらの資源確保の関連があったからである。

## 日本と南アの関係

日本と南アフリカとの関係は、第2次世界大戦前まで遡る。1913年、南アフリカは移民法でアジア人の移民を全面的に禁止した。しかし、日本にとってアフリカで最も経済的な結びつきが強いことから1918年にアフリカ最初の日本領事館をケープタウンに開設している。

南アフリカは1960年のシャープビル事件以来、国際社会から孤立していたが、日本との関係を積極的に強め、1961年、「日本人は人種別集団地域法に関する限り白人として扱う名誉白人」という決定を下している。当時日本は、高度経済成長期でありクロム、マンガンなどの希少金属の需要が大きく、南アフリカがそれらの資源の安定供給地であった。欧米諸国がアパルトヘイトに反対し経済制裁中の1987年、日本は対南アフリカ貿易額が世界一になった。

南アフリカの主な輸出品は金、ダイヤモンド、石炭などの鉱産資源が中心で、この3品目で輸出額の約50%を占めていた。また、果物などの農産物の輸出も多い。現在、南アフリカの輸出先ではスイス、イギリス、アメリカ、日本、ドイツが、輸入先ではドイツ、アメリカ、日本が中心である。日本にとって南アフリカは白金（プラチナ）、金、石炭、鉄鋼、バナジウムなどを供給する重要な国であり、砂糖、トウモロコシなどの輸入先でもある。日本から南アフリカへは機械類や自動車など工業品を輸出している。